

## 巻頭特集：

# いま望まれる，中高連携を重視した教科書— *POLESTAR English Course I*

4月からいよいよ高等学校でも新指導要領にのった新しい教科書の使用が開始される。新しい教科書は「言語の働きと使用場面」が取り入れられたことや、4色化が進んだことで、見た目だけでもずいぶん様変わりしている。

ところでひと足早く新指導要領による授業が始まっている中学校の教科書はどう変わっているだろうか。また中学校の現状はどうなっているだろうか。関係者に伺った情報を元にまとめてみた。

### ■ 新指導要領での主な改訂点

大きな改訂点は、高等学校同様、「言語の働きと使用場面」が指導要領に明示され、それらを網羅的に扱うことになった点であるが、ここでは主に言語材料について触れたい。

#### ◇ 3年間勉強しても出てこない単語もある

まず語彙についてであるが、中学での「指導要領に示された語」（いわゆる中学必修語）が507語から100語に絞り込まれ、総数が1,000語程度から900語程度へと100語減った。以下が今回「指導要領に示された語」である。

a about across after all am among an  
and another anyone anything are as at  
because before between both but by can  
could do down during each either  
everyone everything for from has have  
he her hers him his how I if in into  
is it may me mine must my near  
nothing of off on one or other our  
ours over shall she should since so  
someone something than that the their  
them then these they this those through  
to under until[till] up us we what when

where which who whose why will with  
without would you your yours

ご覧のとおり、ほとんどが機能語であり、指導要領に示されずとも必ず教科書に出てきそうな語ばかりである。つまりこの改訂により、残る800語に関する縛りがなくなり、それだけ教科書によりバラエティーが出るわけである。しかしその反面、旧指導要領で示されていた507語に含まれていた glass, lend といった語のほか、heart, pay, surprised といった、旧制度では発行されていた7社の教科書のうち半数以上で扱われていた語が、新制度では半数以下でしか扱われていない(小社調べ)。

加えて、単位数減とオーラル中心の授業展開のせいか辞書指導はあまり行われていないと聞く。単語の意味を調べるには多くの生徒が教科書の巻末の語彙リストか電子辞書を使用しているため、基本的な辞書の引き方・単語の意味以外に辞書に含まれている情報・発音記号などについては知らない生徒が多く、けっして語彙が豊富という状況ではないようだ。

#### ◇ 「関係代名詞」は高校でも指導が必要

次に文法事項についてだが、以下の文型・文法事項が中学校においては「理解の段階にとどめる」ことになったため、高校では「表現の段階に高める」などの指導が必要となる。

- 主語＋動詞＋目的語の文型のうち、目的語が what などで始まる節
- 主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語の文型のうち、直接目的語が how など＋to 不定詞
- 関係代名詞のうち主格の that, which, who 及び目的格の that, which の制限的用法の基本的なもの

中学校の教科書の内容は会話文が中心で、活動も

「話す・聞く」に重点が置かれているため、speaking, listeningに興味を覚える生徒は多い。リスニング力は以前より上がっている、生徒が意欲的に取り組んでいる、といった声も聞く。その反面3単位では「読む・書く」に割ける時間は限られているようである。そのため接続詞や関係代名詞を含む長めの文の構造や意味の把握は苦手な生徒が多いと言われる。日本語に直すときに、接続詞の意味を主節のほうにかけたり、関係詞節の修飾関係がわからなくなったりするようである。

例) I was reading a book when my sister came home.

(×私が本を読んでいたとき妹が帰ってきた。)

以前に小社でブリッジ教材発行に関連して、中学の文法事項について高校の先生方にアンケートをとったことがある。その中で特に理解できていないとの指摘が多かった項目は：

不規則動詞、進行形・分詞・動名詞の区別、5文型(特に第3～5文型)、冠詞、前置詞句の用法、動詞の使い分け、現在完了、一般疑問文の作り方、関係詞、節(接続詞)であった。

逆にある程度定着していると考えられる項目としては、比較、名詞、代名詞が挙げられた。

体系的に文法を学習していないせいか、何よりも基本的な文の構造が理解できていない場合が多いらしい。「中学の単位数が4単位から3単位に減ったということは単に時間が3/4になっただけではない。授業間の日にちが空くことにより前の授業の復習に、より時間がかかりますから」という話も聞いたが、そんな中で体系的に何かを教える時間をとるのは厳しいと言えよう。

#### ◇ 長い文章に慣れていない

まとまった長さの文章を読む時間の確保はなおさらむずかしいようである。実際の教科書でも中学3年生の最後の本課レッスンの長さは以下のとおりである。

*本文の長さ(うち会話文の長さ)/1文平均の長さ		
A社 Lesson 6	184(34) words	/ 8.33 words
B社 Lesson 10	241(43) words	/ 11 words
Lesson 11	512(94) words	/ 8.36 words
C社 Lesson 8	185(48) words	/ 8.06 words

B社の Lesson 11 は 500 words 以上あるがこれは本課以外のReadingのレッスンに相当すると考えられるので別とすると、いずれも最終レッスンは180～250 words 程度の長さである。

まとまった量の文章を読む習慣がないため、興味をひくイラストや写真があれば何とか読み進むが、字ばかり並んでいると根気が続かない、という中学の先生の声も聞かれる。

### ■ POLESTAR English Course I では中高連携にどう配慮したか

では、以上のような中学の実状を受け、POLESTAR English Course I はどんな点に配慮して編集したかを紹介したい。どうすればスムーズに、なおかつ英語を学び続けることへの期待感をもって高校英語の内容に入ってもらえるだろうか。

#### ◇ 1学期の題材には特に細かく配慮

##### 内 容

Lesson 1, 2, 3 は特に親しみやすい題材を選び、生徒が「『高校英語』はむずかしくておもしろくない」という先入観をもたないように配慮した。

#### 1 Imagining the Next Century

100年前の新聞の未来予想記事から、当時の人々の生活と夢を考える。

19世紀末に電話やカメラ、電球などが次々と発明され、ライト兄弟が空を飛んだ。人々は夢が実現するのを目の当たりにし、未来予想が流行した。

1901年の日本の新聞記事の未来予想記事(スクリーン付の電話で買い物ができる、写真をすばやく送る機械が登場、など)は、予想が当たっているかどうかを考えてみるなどクイズ感覚で読める。

#### 2 Mukai Chiaki – lessons from space

日本人初の女性宇宙飛行士として活躍する向井千秋氏からのメッセージ。

宇宙飛行士として学んだことは、人間には人それぞれの役割があるということ、チームワークの大切さ、そしてコミュニケーションの大切さ。いろいろな国の人とともに働く中で自分を表現するためには、外国語の勉強も必要。

### 3 Fifty Years of Snoopy

スヌーピーで知られる漫画『ピーナッツ』の作者故シュルツ氏がキャラクターの由来や漫画制作のエピソード、漫画と人生について語る。

キャラクターは実経験から生み出されているし、実際の日常のできごとが漫画になることもある。漫画も掲載してその実例を紹介。

自らが創造したキャラクターが読者に愛され、心配されるのは、非常に大きな喜び。漫画を50年描き続けられて幸せだった。

#### 長 さ

1学期は行事が多い。1レッスンを終えるのに何時間もかかったりしないように、また生徒が中学の教科書とのギャップを感じないように、Lesson 1~3は短めにした。1時限1パートのペースで進めるようにパート分けもしている(パート分けは2学期以降のレッスンでもしている)。さらに1文の長さも中学とあまり差のない10語程度にとどめた。

\*本文の長さ / 1文平均の長さ

Lesson 1 240 words / 10 words

Lesson 2 323 words / 10.09 words

Lesson 3 344 words / 10.75 words

#### 文 法 事 項

Lesson 3まではほとんどが中学既習の文法事項であり、既習ではあるが重要な文法事項を繰り返し学習しながら進める構成になっている。高校1年生の初めでは理解が困難と言われる5文型をはずし、課末のInfo-Boxで扱う文法用語には中学で教えられている呼び方を併記した(例) to-不定詞[to+動詞の原形])。

#### イラストや写真をふんだんに

Lesson 1では生徒には想像しにくい100年前の発明品などは写真を多く掲載した。Lesson 3では文章の内容にぴったり合った『ピーナッツ』の実際の漫画を掲載して、生徒の興味を喚起する工夫をした。

#### ◇ その他のより円滑な授業のための工夫

「言語の働き」を中心に扱ったレッスンは独立させた

「言語の働き」レッスンを分けた理由は：

従来の読み物中心のレッスンで、文法事項の他に「言語の働き」表現も学習するとなると、1レッスンが重く長くなる上、学習のポイントが絞れずどっちつかずに終わってしまう懸念があるため、独立させて扱った。また、内容にテーマをもたせることによって単に会話表現を単独で覚えるだけに終わらないようにした。ここでも導入ページに出てくる表現は中学で学習したものに絞っている。

(例) Lesson 4 Let's..../Could you...?/I'd like to do....)

#### 傍注・脚注で理解をサポート

傍注には読解の助けとなる指示語を問う問題などを用意、問題を解くことによって読解のポイントがわかるように工夫した。脚注では場合に応じて生徒がつかずきそうな箇所では語の品詞や変化形を示したり、用例を挙げたりした。

各パートの概要を問うAP(Attention Pointers)も旧版より数を増やした。

#### 文法事項を無理のない順と量で紹介

題材の内容と関連するため、教科書で文法事項を体系立った順で提示するのはむずかしい。が、*POLESTAR English Course I*では、例えばLesson 3で現在完了、Lesson 5で過去完了、Lesson 9で現在完了進行形を扱い、過去完了進行形は英語Ⅱで学習させるなど、無理のない順と量で文法事項が学べるように配慮した。

#### PRONUNCIATIONは日本語との比較からスタート

高校生になっても音読させられると棒読みをする生徒がいるのはなぜだろう。*POLESTAR English Course I*では日本語と英語の違いを説明するところから始めて、発音やリズムの基本を紹介している。

このように、開くページ開くページに工夫のある*POLESTAR English Course I*、ぜひ実物を手にとってその使い勝手の良さを実感していただければと思う。

(編集部)